
ポケットモンスター 目が覚めたら新種？のポケモンになってました。

きらきらぼし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター 目が覚めたら新種？のポケモンになってました。

【Nコード】

N5045R

【作者名】

きらきらぼし

【あらすじ】

ポケモンが大好きな主人公は目が覚めたらなんと新種のポケモンとしてポケモンの世界に！

まずは生き残ることを考えよう。

初めの方はホントに描き始めだったので駄文ですが、後から少しは良くなっていつているはずです。こんな駄文でも楽しんで頂ければ幸いです。

なんじゃこりゃあああああ！！！（前書き）

二作目です。

なんじゃこりやあああああ！！！！

ある朝いつもどろりに目が覚める。

またいつもと同じ一日が始まる……。はずだった。

なのに……。

「ガアーーーーー！！（どうしてこうなったんだあああああああああ）。」

目が覚めたらなんと俺は黄色と黒の毛皮を持つ狼になっていた。

（何が起こったんだ？何か俺、変なもん食ったか？あれか？テストが悪くて怒られたからポケモンになりてえよ！とか思いつつ寝たのが悪かったのか？でもこんなポケモン見たことねえぞ？）

混乱して色々考えているうちにグウーっとな腹が鳴った。とにかく何か食べられるものを探さなくてはならない。しかも自分のことに気を取られていて気がつかなかったがどうやらここは森らしい。

（森なら適当に歩けば木の実とかが生ってるだろ。）

そんな風に思い適当に歩くこと10分

「ガアーーーーー！（すげーーーーー！）」

モモンの実、オレンの実などの木の実を大量に見つけた。実際に食ってみたことは無いのだが、食ってみるとうまい。

そのまま空腹が満たされてきたところで、今から何をするのかを考え始める。

（モモンやオレンが見つかったことからここはポケモンの世界で間違い無い。）

世界が分かったので俺はポケモンになってしまったのだと理解する、だがこんなポケモンは見たことが無い、名前もタイプも分からん。

（じゃあまづはそこからだな。）

とりあえずは自分のタイプを確認しないことには始まらない。そのため自分のタイプを確認する特訓を始めるのだった。

ここから始まるマイレヴォリユーション

この世界に来てから一週間がたった。

俺はこの一週間で大きく変わった。

タイプがみず・あくだと判明し、あとは死ぬ気で技の練習をしていた。

サバイバル経験が無い俺が生きて行くには自分が強くなるしかない
と思ったからだ。

グラエナ、ポチエナの縄張りに入り追い回されたり、ルビー・サフ
アイアに出てくるトレーナーのミツルにゲットされそうになったり
していた。

最初はみずてつぼうもちよろちよろとしか出ずたいあたりぐらいし
が使えなかったが、今ではかみつく、アクアジェット、みずのはど
う、だましうち等の技を覚えた。

何故そんなにも強くなったのか？理由はいくつかある。

一つ目は、生き残り、捕まらないため。

二つ目は、ジム＆リーグの制覇がしたいためだ。

せっかくポケモンの世界にきたのだ（しかも新種のポケモンの姿で）
ポケモンがたった一匹でジムを制覇し殿堂入りするなんて偉業を成
し遂げてみたい。そう思ったのだ。

ジムを制覇するには旅をしなければならない。

俺は近くの高台に登り森じゆうに響き渡るような遠吠えをした。こ
の土地にいままでありがとう、さようならという思いを込めて・・・
。俺の伝説はここから始まる。

《ミツル視点》

「よし。」

準備を終え少し休憩をとる。

今からまたあのポケモンを捕まえに行く。他に見たことの無い青と黒の毛皮に黄色いたてがみをもつ狼のようなポケモンを。

今まで三回捕獲に向かったが、全て返り討ちにあった。しかも驚くことにあいつは戦うことに必ず強くなっているのだ。

僕はあいつを捕まえる。そう心に決めもう一度ゲットに向かうのだった。

初のジム戦！・・・でもその前にちょっと特訓

「あはははははは！無駄無駄無駄無駄ア！！！」。

と次々出てくる野生ポケモンをつじきりでなぎ倒していく。

「あ！珍しいポケモンだ！よし捕まえるぞ！いけ！ナマケロ！」

「（邪魔じゃあ）！」

たまに出てくるトレーナーのポケモンも大体一撃で沈めて行く。
後ろで今倒した短パンこそうが泣いているけど気にしない。

ここはトウカの森。どうやら俺がいた森はこの近くだったらしく
今はカナズミシティに向かいながら特訓をしている。あれから三日
たち俺は更に強くなっていた。

「（ふう〜〜〜）。」

と一息。さつきから連続で襲ってきていたポケモンやトレーナーが
いなくなった。

（これでようやく休憩できるな。）

しかし俺も強くなったものである。初めのころは野生ポケモンにび
くびくしながら暮らしていたというのに。

最近になって俺は特訓により、アクアテール、つじきり、ふいうち
等自分のタイプの技に加え、きりさく、アイアンテール等の自分の
タイプではない技も覚えていた。

それによりいままでよりも弱点をつけるようになり戦闘が楽になっ

た。

「（そろそろ行くか）。」

寢床の確保は出来ているが食料はその日しのぎだ。毎日その日食べるだけの食料を集めなくてはならない。起床、特訓、食料集め、就寝。これが俺の一日のサイクル。

いつも就寝前にはジム戦に心躍らせる自分がいた。

初のジム戦！・・・でもその前にちょっと特訓（後書き）

読んでくださって有難うございます。

ジム戦は・・・次回？

初のジム戦！！ 結果は神のみぞ知る 前編（前書き）

ジム戦です。

お待たせしました。

今回は前編と後編に分けました。

ツツジとのバトルは後編からです。

吠えた。俺は戦いにここに来た、と相手に伝えるように。

「なっなんだこいつ！俺が相手になってやる！」

と言い一人の少年がモンスターボールに手を伸ばす。

「いけ！イシツブテ！」

ポケモンを繰りだす。

「イシツブテ！いわおと」

相手の指示が終わる前にでんこうせっかで距離をつめつじきり。急所に当て一撃で沈める。

「なっ！イシツブテ！戻れ！いけ！イワーク！」

速攻でアクアジェット、相手に当たった反動を利用し中へ、そのままみずてっばう、二撃で決める。

「まっ負けた・・・」

そして、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オン！！！！」

再び吠える。強者を出せと言うように。

そしてついに・・・

「なんですか？さっきから。」

カナズミジムジムリーダーツツジが現れた。

初のジム戦！！ 結果は神のみぞ知る 後編（前書き）

後編です！

ついにツツジと対決！

勝者ははたして・・・

初のジム戦！！

結果は神のみぞ知る

後編

「なんです？ さっきから。」

「ジ、ジムリーダー……」

ようやく来た。

俺の待ち望んでいた相手が。

ようちく始まる。

俺の待ち望んでいたバトルが。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオン!!!」

「ジムリーダー！こいつ！」

「私と、カナズミジムジムリーダーの私と戦いに来たのでしょーうね・
・・・・」

そうだ、俺はあんたと戦いに來た。だが、それは通過点に過ぎない。

「分かりました。カナズミジムリーダー・ツツジがお相手します。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオン!!!!!!!!!!」

俺は再び力の限り吠える。そしてそれが試合開始の合図。

「いきます！イシツブテ！」

相手がポケモンを出した瞬間にアクアジェットで突進する。

「イシツブテ！避けて！」

流石はジムリーダー。今までのトレーナーとは違う。だが、避けられるのも予測の内。

俺は目の前の岩にかみつき、体をひねって方向転換、そのままみずでっぽう。

「なっ！イシツブテ！ころがる！！！」

相手は一瞬動揺したが焦ることなく指示を出す。イシツブテは転がって水を弾きながらこっちに向かってくる、ならばみずでっぽうの勢いを上げ……

バシイン！！！！！！

「なっ！」

弾き飛ばす。相手が驚いているうちに追撃のみずのはどうを繰り返す。

みずのはどうが相手を包み込む。

「イシツブテ！！！」

起き上がる気配は無い。瀕死になったようだ。

「イシツブテ、戻って下さい。いきなさい！ノズパス！！！」

出た。相手の切り札、ノズパス。

今勝てたのは当然ともいえる。相手は本気ではないのだ。

おそらくこのノズパスもジム戦専用のポケモンであり彼女は完全には本気じゃ無いと思うが、ジム戦時の彼女が本気を出した。

「ノズパス！がんせきふうじ！！」

俺は直ぐ上に跳んで避ける。すると・・・

「ノズパス！でんじほう！！」

来た！電気タイプの中でも高威力で命中は低いが当たれば必ずまひになる厄介な攻撃。

命中が低いと言っても、今俺は空中にいる。つまり、身動きが出来ない状況だ。なら・・・

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

みずのはどうで押し返す！！

ドオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！

水と電気がぶつかり合う。そして・・・

でんじほうは俺めがけて貫通してきた。

バチィ！！！！

「グオオオオオ！！」

体中に鋭いしびれが走る。体が動かない、まひしたようだ。

「終わりです。ノズパス、がんせk

相手が俺にとどめを刺そうとした瞬間に、俺はアクアジェットでノズパスに突進した。

ドカア！！！！

「なっ！」

クリーンヒット。仕返した。

「何故……」

俺がまひしたはずなのに早さが下がらず動ける理由は至極単純。ラムの実だ。

このジムに入る前に持っておいた、それだけ。だが、相手はそれに気づかず混乱している。そのすきに攻めさせてもらう！

俺はでんこうせっかで距離を詰め始める。

「くっ！ノズパス！！いわおとし！」

そんな攻撃当たらない。降ってくる岩を避けつつ的確に距離を詰めていく。

「ノズパス！がんせきふうじ！！」

アクアジェットを使い、更に加速。拘束される前に避ける。

そして一気に距離を詰め、勢いをそのままにアイアンテールを繰り出す、しかし・・・

「ノズパス！でんじほう！！」

相手は避けようとせずそのままカウンターを繰り出してきた。

そして俺のアイアンテールと相手のでんじほうは

同時にお互いにヒットした・・・・・・。

決着

「クルル。」

目が覚めた。どうやら気を失っていたようだ。確かジム戦で・・・

「目が覚めましたか？」

後ろで声がしたので反射的に身構える。声の主はツツジだった。

「落ち着いてください、貴方に危害を加えるつもりもゲットするつもりもありません。」

その言葉を聞き俺は構えを解く。

「ジム戦の結果は引き分けです。貴方はあの後私がここまで運びました。」

「……………そうか。やはりまだ早かったのか。もう一度修行のやり直しだ、と思い出口の方へ向かう、しかし……………」

「待って下さい。」

呼び止められた。何故？

「貴方はリーグを制覇する気があるのですか？」

と聞かれた。当然俺はうなずく。

「ならこのストーンバッチを受け取って下さい。」

・・・・・・は？

「トレーナーの指示無しにあそこまで戦えるポケモンを私は初めて見ました。それにポケモンが、それもたった一匹でリーグを制覇するなんてところを私は見てみたいのです。」

しかし・・・・・・ジム戦に勝っていないのだから受け取るわけには・・

「どうか受け取って下さい。貴方の实力はこのツツジが認めます。」

・・・・・・どうやら俺は過大評価されているようだ。だが、くれると言っのなら受け取っておこう。

俺がストーンバッチを受け取り外に出ようとすると、

グウ~~~~~~~~

腹が鳴った。それもかなりのボリュームで。

「ぶっクスクス何か食べて行きますか？」

その日俺は久しぶりに温かいご飯を食べ、温かい寢床で眠った。

次はどこへいこうかな……決まってるけど。

「また来てくださいね。」

ツツジにそう言われコクリと頷く。

昨日は本当にお世話になった。

風呂に入れてもらったりもしたし。久しぶりのお風呂は格別だった。俺は再び歩き始めた。いつまでもツツジに甘えているわけにはいかない。

次にどこに行くかはもう決めてある。フエンシティだ。カナズミから陸で繋がっているし、ジムのタイプが自分と相性がいいのだ。

今回ジム戦を経験して分かった。今のままでは駄目だ。もっと強くなる必要がある。そのためにはもっと修行し、ジム戦にも慣れておく必要がある。

もともとジム戦に順番なんか無いのだ。ゲームでは都合上あの順番に回るしか無かったのだ。

ならば自分に有利なものから攻略していきこちらも修行させてもらおう……というのが俺の考えだ。

問題はルートだ。ここからフエンに行くルートは二通りある。一つはカナシダトンネル、シダケタウン、キンセツシティを通るルート。もう一つはりゅうせいおのたき、ハツシゲタウンを取るルートだ。

言っておくが、カナシダトンネルやりゅうせいおのたきの中を馬鹿正直に通る必要は無い。

こっちはポケモンなのだ。周りの険しい山や深い森を通っていくつもりだ。

だが、本気で迷っている。え？早く決めろ？それが出来たら苦労せんわ！！

俺はなんとなく自分の耳を前足で触る。耳ではない堅い感触が伝わってくる。そう、俺はツツジにバッチを耳に付けてもらったのだ。

その時にいろいろ撫でられたりもしたが……。俺はその時ツツジが言っていた言葉を思い出す。

『待っていますよ。貴方がホウエンリーグチャンピオンになる日を。』

……。そうだ、俺は一刻も早くチャンピオンにならなくちゃいけないんだ。

俺に期待してバツチを渡してくれたツツジの為に。となんか臭いがこれは事実だ、だつたら……

ルートなんか直感で決めちまえーーーーー！

……。どちらにしかなくてんのかみさまのいつとつりーっとし決まった！！

よっしゃー！いくぜー！絶対ジム＆リーグ制覇してチャンピオン
になってやるー！

「ゴオオオオオオオオオオオオ（無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア）！！！」

さつきから次々出てくる野生ポケモンやトレーナーをなぎ倒していく。

前にも同じような事があったが今回はあの時以上の速度だ。

結局俺はりゅうせいおのたき、ハツシゲタウンを通るルートでフェンに行くことにした。

理由は一つ、シダケを通るルートだとミツルがいるのだ。あいつはかなりしつこかった。何度撃退してもまたやってくる。今はあんなのに時間を取られたくないでこちらのルートを選んだのだ。

「いけ！ワンリキー！」

「ヴォオオオオン（どけー）！！！」

相手に一発つばめがえし。瞬殺！

俺はこの道中での連戦によって、多少はレベルアップしていた。使える技も増え、絶好調だった。

……はずなのだが

「おい！いたぞ！」

「どこだ！」

「こつちだこつち！」

現在俺は十何人のトレーナーの大群から逃げている最中である。どうして追われるのかは分かる。単体でジムリーダーと引き分けたポケモンなんて広まらない方がおかしい。

あの場にはツツジ以外にも何人も人がいたのだから。

「いた——いけマッスグマ！」

「見つけた！GO！ズバット——！」

「発見！ゲットしてやる！いくんだ！ゴローン！」

「ガウア————————（くそ————————）！」

誰か助けてくれ————！！

「キルリア、シャドーボール。」

どこからかその指示が聞こえ、俺が身構えた時には

『俺を取り囲んでいたトレーナーのポケモンが一匹残らず瀕死になっていた。』

そして

俺の前には

あの少年が立っていた。

「久しぶりだね。今度こそゲットさせてもらおうよ。」
「グルル（ミッル）……………」

「久しぶりだね。」

「グルル（ミツル）・・・」

くそ・・・こんなところにこいつがいるなんて・・・こんなことならあんなことするんじゃないかった。

～回想～

「（どちらにしまかたてんのかみさまのいうとうりーつとよし決まった！）」

結果はシダケ、キンセツ等を通るルートだ。よし行こうと思った瞬間あの少年の事が頭をよぎった。

「（そーいやシダケにはミツルがいるんだっけ）」

・・・あんなやつに時間は取られたくねーな・・・

やっぱハツシゲルートにしよーつと。

～回想終了～

くつそーなんであの時俺は自分の直感を信じなかったんだー……
と俺が過去の過ちを悔んでいると。

「あれ？その耳に付けているのはもしかしてジムバッチ？」

とミッルが言う。どうやら耳に付いているジムバッチに気がついた
ようだ。

「はあゝ。これで君に勝てると思っていたのに……君は本当に僕
の予想を上回ってくれるね……」

と言いながらミッルが取りだしたものの。それは……………

「ガウツ（それは）……」

「そう、キンセツジムのバッチだよ。」

ダイナモバッチだった。

あいつはやっぱり恐ろしいな……こんな短期間でジムリーダーに
勝てるほど強くなるなんて。

「じゃあそろそろ無駄話はやめようか。」

「グルル（そうだな）……」

あいつと俺とを取り巻く空気が一変する。

そして・・・

「いくよ。」

「ガア（来い）！」

戦いの火ぶたが

切
っ
て
落
と
さ
れ
た
。

全速前進DA ￣思いがけない再開￣ 後編（後書き）

バトルを期待していた皆さんへ、

ごめんなさい！

バトルは次回です。

次回「強者」

読んでくださって有難うございます。

強者 前編

「いくよ。」

「ガア（来い）！」

戦いの火ぶたが切って落とされた。

「キルリア！シャドーボール！」

ミツルの指示とともに相手のキルリアがシャドーボールを放つ。
だが、そんなもの当たらない。でんこうせっかで避け、距離を詰め始める。

「連射だ！」

あいてのシャドーボールの数が大量に増えた。だが俺は焦ることなく冷静に避けて行く。

「やるね・・・キルリア！でんげきは！！！」

だが、次の瞬間相手のキルリアが避けられないほど早い電撃を放つ。
それはまるで槍のように俺に迫ってくる。

でんげきは必ず当たる技だ。ならば・・・

「ゴオオオオオオオオオオ！」

みずてっぽうで押し返す！

そしてお互いの技がぶつかり合い相殺される。

「なっ！」

「ガア（噓）！？」

完全に押し返すつもりだったのに相殺された。

（（やっぱこいつ……つよい））

「キルリア！でんげきh

「ガア（させるか）！」

アクアジェットで突撃し相手の技をキャンセル。

「くっ！」

「ガアウ（まだまだあ）！」

そのままみずのはどう。これで……

「かげぶんしん！」

決まったと思ったら回避されたよ……くっそ！全方位攻撃で分身全部つぶしてやる！

「キルリア！でんげきは！」

全方位からの集中砲火。これに対して俺は、

「ガアアアアアアアアア！」

あくのはどうで迎え撃つ。

そしてあくのはどうはでんげきはを押し返し相手にクリーンヒット。

「キルリア！」

（これは流石に起き上がれないだろ・・・）

だが、

相手は起き上がった。

「キルリア！！！」

（起き上がった！？）

「キルリア。少し休んでくれ。」

ミツルはそう言ってキルリアをボールに戻す。

「次、行くよ。君を捕まえる為に捕まえたポケモン。行け！ゴーリキー！！！」

二体目のポケモンはゴーリキーだった。くそっ相性が悪い・・・だが！

「ゴーリキー！からてチョップ！！！」

俺はでんこうせっかで避けて、カウンターにつばめがえしを叩き込む。

一撃で決めれば問題無エ!!

そしてツバメ返しは相手に直撃し……………

相手は

耐えた。

「ガッ（なっ）!？」

更に、

「ゴリキー、カウンター。」

ドスッ!!!

鋭いカウンターが俺に直撃した……………

強者 後編

「よし……。」

今のカウンターは完璧に入った。弱点を突かれたことには驚いたが、そのおかげで結果的に威力は上がった。

これならもう起き上がることは……いや、起き上がってくるだろう。

それが分かっているからこそ少年は一切油断することなく空のボールに手を伸ばす。

（もうボールを投げてもいいのか？）

と思い、ボールを手についた時、『アイツ』は起き上がった。

（くっそ！やられた！）

そう心の中で悪態付きながら痛む体に鞭打って起き上がる。

足はガクガクと震え、体が軋んでいる。

まさかここまで成長しているとは思わなかった。

素早い相手に対抗する為、わざと一撃食らってからカウンターを叩き込む。

シンプルだがなかなか効果のある作戦だ。

）（どうする？このダメージじゃ逃げることも撃退することも難しい。）

俺はこの世界に来てから生き残ることを最優先に考えてきた自分の脳をフル回転させる。

今考えるべきはこの状況を脱する方法。

そのことのみを考え俺の脳みそは回り続ける。

（あいつのポケモンが二体のみとは限らない。これが今のところの一番のネックだな。）

実のところ、相手のポケモンがあのだ二体のみならこの状態でも勝てる自信はあった。

ゴリキーは弱点を突かれたことによりもう立っているのがやっと。キルリアも同じだ。

それにその二体は俺より遅いため俺は先制攻撃が出来るのだ。

だが、相手が他にもポケモンを持っていれば俺が詰む可能性は急激に加速する。

自分にとって有利なタイプなら何とか行けるかもしれないが、不利なタイプなら……。

いや、ネガティブな考えはやめよう。本当にそうなってしまふ。

ミッルがゴリキーに何か指示しようとする素振りを視界の隅に捉えた為俺は一旦思考を中止し相手を見る。

今俺と対峙している少年は、

笑っていた。

「あれでもまだ起き上がってくるか・・・まあそうだとは思っていたけどね。」

僕は呆れと喜びが入り混じったような感情が出てくるのを感じていた。

あの様子だと、だいぶダメージを与えはしたがゲットするためにはもう少し体力を減らさなければならぬだろう。

「楽しいよ。君とのバトルは。」

僕はまだまだこのバトルを楽しみたい、ここで逃がして、もう一度今度はお互い今よりもっと強くなってまたバトルしたいということを思い始めていた。

「いや、僕は一体何のためにここまで頑張ってきたんだ。」

そう、他でもないあのポケモンをゲットするためではなかったのか？僕は雑念を振り払い意識を相手へと向ける。

「そろそろ行かせてもらおうか。」

アイツがこちらを見る。軽くないダメージを負っているはずなのにその瞳には今なお闘志が宿っている。

「ゴリキー、けたぐりだ。」

僕はゴリキーに指示を出す。指示を聞いたゴリキーは相手にその技を当てるべく相手の下へと向かっていく。だが、その攻撃はアイツには当たらない。素早く跳躍し回避する。しかもそのままアイツはみずてっぽうを放つ。マズイ、今のゴリキーじゃこの攻撃は避けられない。

「ゴリキーまもるだ！」

とつさに指示を飛ばす。僕の指示ど通りにまもるを使ったゴリキーはなんとか攻撃を防ぎきる。

しかし、相手の攻撃はこれでは終わらない。続けざまに追撃のアクアジェットで突っ込んでくる。

突然のことに対応が遅れ攻撃は直撃する。

「ゴリキー！！！」

今の攻撃で吹っ飛ばされたゴリキーに声をかけつつ駆け寄る。ゴリキーは瀕死状態になっていた。

「くっ・・・ゴリキー、戻ってくれ。」

ボールを取り出しゴリキーを中に戻す。

「出てこい！キルリア！」

次だ！まだ僕は戦える！

キルリアもそんな僕の感情に応え気合いが入っている。

「さあ行くぞ！まだまだこれからだ！」

（よし。なんとか一体は倒した。）

だが油断はしない。一瞬の油断が原因で敗退した例も多い。相手も、そのキルリアもその闘志は消えていない。

こちらに少しでも隙があれば、即座に攻撃してくるだろう。俺自身もそろそろ限界だ。なるべく早めに終わらせて休み体力を回復させる必要がある。

俺を追ってきているトレーナーはこいつだけではないのだ。今のような状態で何十人もトレーナーに突撃されて逃げ切る自信は無い。しかし、焦りは禁物だ。相手のポケモンがこれだけだと決まったわけではないのだ。

焦って伏兵の可能性を考慮しなければ負けるのは俺の方かもしれないのだから。

両者の気が激しくぶつかり合って火花を散らす。

これが最後の攻防になることはお互いに分かっていた。

そしてお互いが大技を繰り出そうとした、

まさにその瞬間。

「おーい！こっちだー！こっちからすごい音がするぞー！ー！」

「へ？」

「ガ（え）？」

あまりにも突然の事態に俺とミツルの二人は固まってしまった。

だが・・・

「どっちだー！ー！？」

「こっちだー！ー！！」

「こっちじゃ分かんねんだよボケー！」

「うるせえー！ー！こっちつつたらこっちなんだよー！ー！」

そんなやり取りがだんだん近づいてきていることに気がついた俺は慌てて逃げ出す。

「なっ！逃げるな！」

ミツルがなんか言っているがそんなの気にしている場合じゃない。
でんこっせつかを使いさつさとこの場を離れる。

少しずつ声が遠ざかっていくのを聞きながら俺は自分の力不足を痛感し深く落ち込んだのだった。

「はぁ……逃げられたか。」

追跡しようにも既にキルリアはぼろぼろだ。アイツの速度を考えると今から追跡しても、追いつけないだろう。

（もし邪魔が入らずにあのまま勝負していたら勝てただろうか？）

ふと、そんなことを思う。

確かに僕は前までは手も足も出なかったアイツにそこそ大きなダメージを与えた。

だが、手持ちが深手を負ったキルリアだけのあの状態で、相性も不利なあの状況で、

勝てただろうか？

……たぶん、負けていただろう。

とりあえずは、もっともっと強くならなければアイツには勝てない。

それが分かっただけでも収穫かな。

その少年は負けたにも関わらず、清々しい笑顔だった。

「ハアハア」

（どうやら逃げ切れたようだな。）

あの後俺はかなり必死に逃げていた。

戦闘で傷ついた後に全力疾走させられて・・・ぶっ倒れそうだ。

（マズッ・・・）

とうとう耐えきれずに俺は倒れてしまった。そのまま抗うこともできずに俺の意識は闇に沈んで行った。

強者 後編（後書き）

今回は他の方から少し短いのもう少し長くした方がいいとの指摘を受けた為、長くしてみました。どうだったでしょうか？

私は文才が無いただの駄目作者ですが、皆さんが少しでも読みやすい小説を書くためにこれからがんばっていいこうと思います。

批判、指摘、アドバイス等がありましたら教えて下さい。

その点を改善していいこうと思います。

婆ちゃん凄えな！！！！

「グア（んあ）？」

「……見知らぬ天井だ。

あれ？あつれー？

俺は周りを見渡してみる。

白い壁紙、ごく一般的な薄型テレビ、フツのタンス。

マジで何処？ここ。っていうか俺はどうやってここまで来たの？

「おやおや。目が覚めたみたいだねえ。」

と、不意に声がかかる。

俺はその方向に顔を向ける。すると……

誰かは分からないが結構なお年に見えるお婆ちゃんがいた。

「とりあえずはもう少し休んでおくんだよ。」

そう言って台所の方へ消えていく老人。

「……ココどこー？」

「だいぶ良くなったみたいだねえ。」

俺の目が覚めてから一時間ほどたち、俺はだいぶ元気になっていた。食事をごちそうしてもらい、ゆつくりと休ませてもらった。

しかし……この婆ちゃんは一人暮らしみたいだな、家族の人が誰もいない。

俺みたいな見知らぬ野生ポケモンを家の中に入れていいのだろうか・

「でももう少し休んでおくんだよ。」

と言われ、俺はコクリと頷く。それに対して婆ちゃんはニコリと笑う。

「じゃあ私は水を汲んでくるからね。」

と言って外へ……とちよつと待てえ！！

婆ちゃん、老人が、それに女性が一人で水汲みですと！？無謀にも程がある。

俺は後を追うように外へ出た。

そして、驚いた。

周りに家が全くないのだ。入口から見て右側には木々が、左側には

岩山がありこの家はそれらに囲まれている。

こんな所にたった一人で……と思い家を見ようとすると家の前の看板に気が付く。

その看板にはこう書いてある。

『ケンコーおばさんの家。』

……え？ええ？

この方が、この方があのケンコーおばさんなのですか？

ゲームでものすごい世話になった。あの？

ってことはここは111番道路？

……マジッスか……。

と衝撃の事実に硬直していると、

「ここら。ちゃんと家で休んでなくちゃ駄目じゃない。」

と婆ちゃんが言うてくるが、世話になりっぱなしなのにもかかわらず何もしないのもいけないと思いついて行こうとする。
すると婆ちゃんは、

「ホントーにホントーに大丈夫かい？」

と聞いてきたので大丈夫だと証明するために力いっぱい頷く。

「そうかい。じゃあお願いしようかねえ。」

そんなわけで俺は婆ちゃんと一緒に水汲みに行くことになった。

「じゃあ行くよ。」

と言った瞬間、婆ちゃんの姿が消える。衝撃の余波により砂ぼこりが上がり、俺は吹っ飛ばされ木に頭から突っ込む。

思いつきり突っ込んだため色々な太さの枝が折れている。

一瞬何が起きたか分からなかった。

どうやら婆ちゃんが走り出した瞬間にそのあまりの速度にソニックブームが発生し、俺が吹っ飛ばされたらしい。

（確かにケンコーだなあ。）

そう思った瞬間、俺は再び意識を手放した。

「クル（あれ）？」

知らない天井、本日二回目。

「目が覚めたかい？だから家で休んでおきなと言ったのに。」

いや、婆ちゃん・・・あれはそういう問題ではなく・・・

「いいかい。今度こそしっかりと休んでおくんだよ。」

いや、あの・・・行ってしまった。

婆ちゃんが夕食の準備を始めてしまったため、俺は暇になった。そのため、明日からどうするかを考え始める。

まずは状況を整理しよう。

1：まずここは111番道路のケンコーおばさんの家である。

2：俺はだいたい回復している。

3：フエンに近くなったことにより行くことが容易になった。

・・・ぐらいだろうか？

とりあえず予定とは違うがこちらにとって良い状況になった事はあ

りがたい。

明日になったら、直ぐにフエンへと発とう。

だが今は、

「ご飯が出来たよー。」

もう少しこの暖かさに触れていたい。

そう思った。

婆ちゃん凄えな！！！！（後書き）

今回はバトル無しです。

流石ケンコーおばさん。

（何が流石なのかは良く分からない）

フエン到着！　やはり温泉は最高だった

「じゃあねえ。また来ておくれよお。」

俺は頷き、婆ちゃんに見送られながらその家を出る。

この後の予定は、まっすぐフエンに向かう。

俺の予想だと余程の事が無い限りは、今日中に着ける筈だ。

ルートも昨日俺の頭の中のハウエンマップで最短ルートを導き出したのだ。

なお、その脳内マップは8割がうる覚えである。

まずは、ほのおのぬけみちに入りそのまま112番道路に行く。

さって、行くかあ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・暑い。

なんでこんなに暑いのと暑さのあまりバカな疑問を抱く俺。

ほのおのぬけみちなんて名前なんだから暑いに決まっているだろうが！！！！

だが、出てくるポケモンも炎タイプが多く、俺にとっては、意外と良い修行場所である。

・・・・・・・・暑ささえ無ければ。

だが、この暑さで流れる汗もフエンの温泉で洗い流そうと思えばいいか・・・

など、もはや観光でしかないようなことを考えながら出てきたコースにアクアテールを食らわして仕留める。

・・・・たしかフエンのジムは暑いんじゃないか？

嫌だなあ……軽く鬱になりそう。

ココだけの話、俺は暑さが何よりも苦手だ。だから夏は毎年地獄を見ていた。毎日クーラーガンガン。

しかもその部屋でアイス等を食べるありさま。

まあ、ここまでは普通だろう。だが本当に暑がりな俺は冬にもクーラーを付けたりしていた。

あつついなあ……

もはや俺の頭の中は早くここから脱出することしか無かった。

(ふう……。)

五分ぐらいして、ようやく俺はあの地獄サウナから脱出し112番道路の南側に來ていた。

そう、あのロープウェイ乗り場がある場所である。最初に來た時にアクア団orマグマ団のよって入口がふさがれている場所である。

……あれって、うざいよね……

まあ過ぎたことは気にせずにもうここまですればフエンはもう目と鼻の先。

ここはゲームでは段差があり、右から左へ(キンセツからフエンへ)行くことが出来ない。

だが……

フツーにとび越えればよくね？

と言う結論が出て早速実行。

結果：成功。

あれー？こんなにあっさりいてもいいのかな？

……まあいいか。行けたことだし。

さてと……改めてフエンに入るか。

(おお～～～～～)。

温泉も砂風呂も、生で見ると一味違うな。

因みに今はもう夕方である。そんなに時間がかからなかったにも関わらず何故鴉が鳴いているのか？

それは俺が夕方近くに家を出たからである。

その理由は、まだ俺を狙ったトレーナーが近くにいることも考え温泉には夜に入ろうと思い、なるべく丁度良い時間になるようにしたのである。

もう少し暗くなったら温泉に入りに行こうと考えているために今は・

砂風呂じゃ――！

人間初めての事に関してはテンションが上がるものだ。何？今はポケモンだろ？

・
・
・
・
・
キンスナ。

さうして砂風呂入るか。

「ガー（んー）？」

・・・どうやら寝てしまっていたようだ。

もう空は真っ暗だ。

そろそろ温泉に入ろうかな。

いい湯だな

これだけでもここに来た価値はあったな。

なうんて事を考えつつも明日の事を考える。

（たしかこのジムリーダー、アスナのポケモンはオーバーヒートを覚えているが多い。）

明日は絶対に勝つ。そのためにここに来たのだから。

そのためにもこの温泉で、しっかり疲れを取っておこう。

フエン到着！　　ゝやはり温泉は最高だったゝ（後書き）

ジム戦　～戦闘開始～（前書き）

二作品同時執筆最初の更新です。

頑張って行くので、どうか温かい・・・なんて贅沢は言いませんので、冷たくない程度の目で見守って下さい。

ジム戦　～戦闘開始～

（よし。）

俺は今、フエンジムの前に来ている。
そう、今日俺はジム戦をしに来たのだ。

（行くぞ！）

ウィーン　（自動ドアの開く音）

もわわわ～～～～ん

「ゴォーーーーー」――（暑）――
「！」

「ハアハア……………」

（何だあのジムは！？ドアが開いた瞬間にこう、もわわわ……
んともものすごい熱気が。）

フエンジム。ここは想像以上に厳しい戦いになりそうだ。

だが、俺に元より後退の文字は無い！

いざ行かん！

「ふう……………」

私はフエンジムジムのリーダーのアスナ。

最近ジムリーダーになったばかりの新米だ。

最初のころは右も左もわからなくて挑戦者にも迷惑をかけていた。

だが、経験もそれなりに積んで、そこそこマシになってきたと自分でも思えるくらいにはなつたと自負している。

ウィーニン

ドアの音だ。挑戦者？

「ゴォー――――！！」

と思っていると、ドアの方からものすごい咆哮が聞こえてきた。

いつ、
一体何？

(やっぱり中は暑いな・・・)

覚悟を決めて、ジムの中に入った俺はやはり暑さに慣れないでいた。

あまりの暑さに汗をかきながら周りを見渡す。
気温以外はカナスミジムと大差は無いみたいだ。
俺が周りを見渡していると

「さっきの声は君？」

後ろから声がしたので振り向く。

そこにはフエンジムジムリーダーのアスナが立っていた。

俺は、質問に対して肯定の意思を示すために頷く。

「何しに来たの？」

二つ目の質問が飛んでくる。

それに対し俺は、戦いの意思を示すためバトルフィールドに入り

咆えた。

俺の咆哮がジム内に響き渡り、その余韻を残す。

俺の意思に応えるかのように、アスナもその闘志を燃やし

「!!」

「行け! マグマッグ

ポケモンを繰り出してきた。

炎と水の戦いが今、幕を開けた。

ジム戦　～戦闘開始～（後書き）

今回は少し短いです。
戦闘は次回からです。

炎VS水 くぶつかり合う力く 前編

相手のマグマッグと俺はお互いいまだ行動を起こさず睨みあっている。

お互いに動かず、シンと静まり返る空間。相手のマグマッグの体表がパチパチと爆ぜる。

あまりの暑さと緊張のあまり俺とアスナからは絶え間なく汗が流れ落ちる。

ピチヨン、ピチヨン、ピチヨン

パチ、パチ、パチパチ、パチ

そして、お互いが動いたのは全くの同時だった。

「マグマッグ！スモッグ！」

（毒にする気か・・・）

俺は放たれた紫色の気体をみずてっばうで無理やり霧散させる。反撃しようとした頃には、アスナは既に次の行動に移っていた。

「ひのこ！」

俺は攻撃の軌道を見きり、最小限の動きで回避。そのままみずのはどうを放つ。

「いわおとし！」

相手は自分の周りに岩を落とし、その岩に隠れ広範囲に広がる波動を避ける。

（やるな・・・）

アスナはゲーム内だと新米のようだが・・・

（ジムリーダーの名は伊達じゃ無いという訳か・・・）

「のしかかり！」

跳びかかってくる相手にカウンターとしてアクアテールを当てる。

ドゴンッ！！！！

相手は地面に叩きつけられ、そこから砂ぼこりが巻き上がる。

煙がはれると、そこにはクレーターの中で目を回す相手の姿があった。

「　　ッ！戻って、マグマッグ。行って！バクーダ！」

（次はバクーダか・・・）

相手のタイプは炎・地面。水タイプの攻撃は通常の四倍。相性面では俺の方が有利だ・・・

しかし、前回戦ったツツジは相性が不利にもかかわらず引き分けにした。

タイプが不利でも勝てる戦術。それを相当考えているようだ。今回のアスナも同じだ、みずのはどうの水流をいわおとしの岩を盾にして防いだり・・・やはり一筋縄ではいかないようだ。

「バクーダ！たいあたり！」

カウンターを取ろうかとも思ったが、この体重差では俺の方が押し負けるので回避を選んだ。

さらに俺はフィールドにみずのはどうを放つ。

みずのはどうは一瞬でフィールドを水浸しにした。

さっき出来たクレーターにも水は溜まり、大きな水たまりになっている。

（これである程度の動きと、マグニチュードは封じた。）

全てのポケモンに言えることだが、あいつらは自分が苦手なものには近づけない。

例えば、サイドン、ゴローニャ、ヒノアラシなどの水が苦手なタイプは水辺に近づかない。

クレーター内の水たまりのせいでうかつに周りには近づけないし、マグニチュードなんぞ使おうものならその振動によって水が跳ね、余計なダメージを負う事になる。

ぶつちやけ、クレーター内に俺が押し込んでも良い。

それが分かっているのか、アスナも苦い顔をする。

だが、直ぐに鋭い顔へと変わりバクーダに指示を出す。

「バクーダ！メロメロ！」

メロメロ！？そんなのも覚えてんのか！

こいつは当たったら洒落にならん。

俺はハート形の弾を軌道を読んでの確にかわす。

「メロメロ！」

さっきから同じのしか撃つてこないな・・・一体何が目的ッ！！

急に地面が消え、足を踏み外す。

俺の後ろにはさっき俺が作ったクレーターがあった。

「バクーダ！オーバーヒート！！」

（クソッ！！）

さっきまでのメロメロの連打はこの為の布石だったのか！

避けることはできるが、それをするこのクレーター内の水が全て蒸発するだろう。

そんなことになれば俺は一層不利になる。ならば、

賭けるしかない。

俺にとってとても不利な賭け。

だがこの賭けで勝負が決まるかもしれない。

・・・やってやる！

こんなにワクワクしたのはこの世界に来てから一度のみ、ツツジと

のジム戦以来だ。

（いくぜ・・・）

俺は力を最大限まで溜め、

ハイドロポンプを放った。

「よしっ・・・」

追い詰めた。アイツの後ろにはクレーター、水を溜められたときには焦ったけどこうなればこっちのものだ。

「バクーダ！オーバーヒート！！！」

私はバクーダに指示を出す、これなら避けられないだろう。そう思っていた・・・

だが、次の瞬間。アイツはなんとハイドロポンプを撃ってきたのだ。

（嘘！？）

ここまでなんて・・・アイツの実力を見誤っていた・・・。

こいつはそこらのトレーナーなんか目じゃ無い程強い。

ハイドロポンプとオーバーヒート。炎と水。赤と青。

二つの力がぶつかり合い

すさまじい爆発と煙が起き、立っていたのは

奴
だ
っ
た。

炎VS水 くぶつかり合う力 後編（前書き）

さあ決着です。

炎VS水 くぶつかり合う力く 後編

お互いの大技の激突。

それは大きな爆発を引き起こしフィールド中に砂ぼこりを広げた。

「くつ・・・」

はたして奴は立っているのか？

砂ぼこりが晴れ、そこに立っていたのは

奴だった。

「ハアハア・・・・・・・・」

（危なかった・・・・・・・・）

ハイドロポンプとオーバーヒートがぶつかり合った時、俺は正直危なかった。

俺のハイドロポンプはまだまだ未完成。そんな状態であの大技とぶつけ合ったのだ、真正面からぶつけずなるべく弾きやすい角度に撃

ちこんでも相殺が精々。

（なんとか大ダメージは凌げたか・・・）

爆風に巻き込まれはしたものの、とっさにクレーターの中に隠れ、大きなダメージは避けた。

それに対して相手は爆風をモロに食らった為、そこそこ大きなダメージになっているようである。

（攻めるなら・・・今！）

俺は止めを刺す為に、相手との距離を詰め始めた。

「マズイ・・・」

相手が距離を詰め始めた。

バクーダには相手の攻撃をかわせるような機動力は無い。

今の体力と奴の攻撃力を考えると、おそらく一発K・Oさせられてしまうだろう。

それにこの状況で使える技にも限りがある。

オーバーヒートはおそらくもう意味を成さないだろう、メロメロはさつき使いすぎたせいでPPが殆ど残っていない、マグニチュードなんか使ったら跳ねる水で自滅することもあり得る。

そんなことを考えている間に、奴はもう直ぐそこまで迫ってきていた。

「ーーーーッ！！バクーダ！たいあたり！」

苦し紛れに指示を飛ばすもあっさりかわされカウンターのアクアテールを受けてしまった。

頭にクリーンヒットしゆつくりと倒れるバクーダ。

倒れると同時にドサツッという重みのある音が響く。

「バクーダ、戻って……」

強い。

アイツは強い。

おそらくここに来るために相当な修羅場をくぐってきたのだろう。

だが、

私も負けたくない。

負けるわけにはいかない。

「行つて！！コートス！！」

刮目しろ。

この私。フエンジムジムリーダー、アスナの闘志を。

「行つて！！コータス！！」

（やはり最後はコータスカ）

俺はある程度予想していたことだったのであまり驚かない。
まあ、対策なんて全くできていないが・・・
たしかアイツは「しろいハーブ」持っていた・・・と思う。

（オーバーヒートの威力が下がらないのは痛いな・・・）

さっきのバクーダに勝てたのは、オーバーヒートの威力が下がっていたからでありもう一発同じ威力で撃たれていたら俺は負けていた、負けなかったとしても大ダメージは免れなかっただろう。

（さて・・・どうするか・・・）

しばしにらみ合いが続く。

だがその間もお互いに少しずつ動き相手の隙を窺っているため、ザリ・ザリと砂利がこすれあう音が聞こえる。

戦う前はそれなりに整っていたフィールドは今やところどころクレーターが出来、水浸しになっている。

そして先に沈黙を破ったのは俺だった。

アクアジェットで一氣に後ろに回り、みずてっぽうを放つ。

「かえんほうしゃ！！」

だが、直ぐに方法転換しかえんほうしゃで相殺してくる。

（早い・・・）

再びにらみ合いが始まった。

（早い・・・）

さっきの回り込みからのみずてっぽう。

あれに反応出来たのは運がよかっただけかもしれない。

相手がまた後ろに回り込む、そして今度はアクアジェットで突っ込んできた。

「からにこもる！」

だが、次の瞬間。コータスは己の堅い殻に潜り身を守った。相手は弾かれ中に舞う。

しかしそのままみずのはどうで反撃してくる。

「ッ！！かえんほうしゃ！！」

とっさに指示を出し攻撃を相殺する。

（このままじゃ埒が明かない・・・）

よし、

勝負に出よう。

「しろいきり!!」

相手が動いた。

（霧に身を隠しての不意打ちか・・・）

策としては悪くない、だが数多くのトレーナー達に待ち伏せ、不意打ち、その他もろもろのことをされている俺はその戦法には慣れている。

俺はアクアジェットで霧を晴らしながら相手に突撃する。

「からにこもる!!」

ガキィ!!

俺とコータスがぶつかり合い俺は弾き飛ばされる。この状態だと回

避が出来ない為、牽制としてみずてつぽうを放つ。

「避けて！」

相手に攻撃を避けられたがその隙に俺は着地「オーバーヒート!!」
何!?

(着地と同時に大技。確かに良い戦法だが・・・ここで!?)

避けることは不可能なので、ハイドロポンプで迎撃する。だが少し
ずつ押され始める。

(くっ!!)

危険だと判断しアクアジェットで空中に緊急離脱する。

「オーバーヒート!!」

もう一発!?ここで決めるつもりか!

軌道を変えても避けきれない、だからといって迎撃も不可能。

(くそっ!!)

少しでも直撃を避けようと軌道を変える。

次の瞬間

巨大な炎の壁が俺の体を包み込んだ。

「やった・・・」

はつきりとこの目で見た。直撃だ。

流石にあの状態でオーバーヒートを食らえば倒れるだろう。

だが、奴は悪い意味で私の期待を裏切った。

奴はふらふらの状態で立ち上がってきたのだ。

「なんで・・・」

奴はまだあきらめていない。

奴の眼にはまだ闘志が残っている。

いくら奴がぼろぼろといっても、大技の連発でコータスも息が荒い。

おそらく次が最後の攻防。

「コータス！！オーバーヒートオオオオオオ！！！！」

私は力の限り最後の指示を叫んだ。

私の攻撃に対し奴はハイドロポンプで迎え撃つ

そして

青と赤の軌跡が交差した瞬間

赤は青に飲み込まれ

そのままコータスを飲み込んだ。

戦いの後に・・・（前書き）

学校が始まったー！

忙しくなっ てまいりました。

更新ペースは結構下がります。

戦いの後に・・・

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

知らない天井・・・最近多いな。

目を覚ました俺はあたりを見渡す。・・・・普通の部屋だな。

窓から外の様子を見ると真っ暗で、月が出ていた。どうやら、夜ま
で寝ていたようだ。

さて・・・・どうするか、と思い始めた時に近くでスースーと寝息
が聞こえた。

振り返ってみると

アスナが部屋のソファで寝ていた。

(・・・・・・・・・・どゆこと??)

俺の頭は状況についていけないのだが・・・・

(・・・・・・・・まあ、いいか。)

こんな夜中に起こして事情を聞くのも失礼だろうし、もう一度寝て
明日改めて事情を聞くことにしよう。

そう思い俺は、再び夢の世界に旅立った。

「うっん・・・」

窓から差し込む朝日がまぶしくて目が覚める。

（あの子は・・・？）

昨日のジム戦後に倒れてしまった挑戦者を自分のベッドで寝かせていた事を思い出す。

ベッドを見ると、目にクマを作っている奴の姿が合った。

・・・え？なんでクマ？

（・・・寝れん！！）

その後、結局俺は十分に眠ることができなかった。何故かと言うと

恐ろしい夢を見てしまい、その後あまりの恐怖に寝たいのに寝れなかったからだ。

だって！！明らかに世紀末な人がモンスターボールを構えて、自身の炎ポケモンであたりを焼き払いながら「ヒヤッハー！汚物は消毒だー！！！！」とか言いつつ俺に向かって来るんだよ！！怖いでしょ！！っていうかここはホントにポケモンの世界なのか疑問に思えてきたんですけど！！

つと言う訳なのである・・・実際過去にそんな人に追い回された記憶がよみがえってくる。

・・・あのときも寝れなかったなあ・・・

「あの一・・・」

と思っていると後ろか声をかけられた。この声はおそらくアスナだろう。

俺はゆっくりと振り向く。

するとそこにはなんか呆氣にとられたような顔をしたアスナがいた。

えーっとなんてそんな顔してるの？

「あのー……………」

私はおそろおそろ声をかける。

すると奴はゆっくりと振り返る。完全に振り返ったことを確認してから私は質問を始める。

「この耳に付けているのってカナズミジムの……………」

すると奴はこちらが何を言いたいのかを理解したように頷く。

（やっぱり…………じゃあ。）

私は懷からヒートバッチを取り出し奴の耳に付ける。

奴は驚いている様子だったがそれを無視して私は言った。

「おめでとう。」

久しぶりに熱いバトルだった。

戦いの後に・・・（後書き）

う~~~~む、感想・・・というか指摘が無い。

何処を直したらいいのが全く分からない。

っと言っ訳で悪いところを見つけたらバンバン指摘して下さい。
無論、普通の感想也大歓迎です。

少しづつ、されど確実に物語は動く。

「ガ~~~~~（あ~~~~~）。」

今現在俺は温泉に入っている。

何故かって？そんなの簡単。疲れ切った心と体をリフレッシュするためさ！

そんな訳で俺は今、温泉に入っているのだが…………。

「ガ~~~~~ア~~~~~ウ~~~~~（き~~~~~も~~~~~ち~~~~~）。」

…………最高だ。

今までの疲れが温泉の中に染みだしていくかのように疲れが消えていく。

少し熱めの湯に肩まで（何処が肩なのかはよく分からないが）浸かってゆつくり過ごす…………

やっぱこれだな！ 温泉は最高だ！！

ビバ！！ 温泉！！！！

ゆつくりゆつくり温泉を堪能し、俺は今まで（この世界に来る前から）一度も経験の無い砂風呂に入ってみたくなり、一旦温泉からあがり砂場へ向かう。

そこで温かい砂を掻き分け、自分が入れるくらいのくぼみを作ると俺は顔以外を砂に埋めた。

そのとき！！俺に電流が走った！！！！

(き、気持ちいい……………)

こうして、ものの数秒で砂風呂の虜になった俺は至福の時間を過ごしていた。

しかしこの後、予想もしていなかった事が起こる。

ガブッ！！！！！！

……………

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア(いつてええええええええええええええええ)……………」

何だ！？ どうした！！？ 何が起った！！！！？ 突然俺の尻に猛烈な痛みが！！

俺は何が起こったのか確認しようと後ろを向く、そして俺の目に入ってきたもの。それは…………

「ガア？」

ガブリアス……………

何でお前がココにいるの？ お前はシンオウ地方のポケモンでしようが。って言うかココは街だよ？ ココにいるってことはトレーナーがいるの？

と様々な疑問が俺の頭の中で渦を巻き俺を混乱させる。一度深呼吸をして冷静になった所で、尻を咬まれた痛みを思い出す。

怒りにまかせ奴に跳びかかろうとした次の瞬間。

「こら！ ガブリアス！！」

お怒りの声がする。いくら驕がなっていないからといって、ガブリアスはそれなりに珍しい上にとても強力なポケモン。つまりそのガブリアスを扱うトレーナーはかなりの実力者であることは確実なのだ。そんな腕利きのトレーナーを一目見ておこうとして目に入ったのは本当に、本当に意外な人物だった。

シロナさんじゃん……………

何故！？ どうして！！？ どうしてなの！！！？ と再び疑問の嵐が俺の頭を駆け抜ける。大きすぎる疑問のせいで思考が停止していた俺に対して彼女は、

「ごめんなさい。この子、とてもやんちゃで……………」

と謝ってくる。それに対し俺は気にしないで欲しいと言っかのように首を横に振る。

「有難う。それじゃあね。」

そんな言葉を残し彼女は去って行った。……何しに来たの？ シロナさん。だが、今はさっき邪魔された俺の至福の時間、砂風呂をもう一度満喫したいという思いが上回っていた為、その疑問は直ぐに消えてしまった。

その後、俺は今度こそ邪魔されずに温泉と砂風呂を満喫し、最高の一日を過ごした。

「ガブリアス、今度は勝手にどっか行っちゃ駄目よ。」

さっきの二の舞にならないようにしっかりとくぎを刺す。私はガブリアスがしっかりと領いたのを確認してから歩き始める。

それにしてもさっきのあの子……

（耳に付いていたのはストーンバッチとヒートバッチ。何故ポケモンが……）

あれ等ジムバッチとは本来、ジムリーダーと挑戦者が戦い勝利した挑戦者に与えられる勝利の証。つまりはポケモンが持っていることなどあり得ないのだ。

（調べてみようかしら。）

そう思い、まず始めにヒートバッチの管理者であるフエンタウンのジムリーダー、アスナに会うことに決め、向かおうとしたがガブリ

アスが再び行方不明となり探す羽目になった。

あの後俺はしっかり温泉と砂風呂を堪能し、フエンで一晩明かして、さあ！ 次の目的地へ出発！！
てな感じで意気揚々だったのに……

「待て待て待て待て待て待て待てエ！！！！」
「ヒヤッハーハー！！！！逃がさねえぜエ！！！！」
「大人しく捕まりやがれエエエエエ！！！！」

どうしてこうなった……………

「マリちゃん！ みずてつぽうだアアアア！！」

やめて！！ お前らのその外見で！！ 明らかに世紀末っぽいその外見と俺を追う時の恐ろしい性格で！！ マリルにマリちゃんなんて名前を付けないでエエエエエエエエエエ！！！！

現在俺を追いかけているトレーナーは三人。それぞれのポケモンは、マリルのマリちゃん。

ブビィのブーたん。

イ ブィのブィブィ。

何でお前らはそんなかわいいポケモンしか持って無えんだよ！！！！

何！？ お前らー！！？ そのかわいさで相手を油断させて殺ってやるぜ！！ ヒャッハー！！！！！！ って訳！？

そんなことを思い半ば混乱状態の俺に、容赦無く攻撃がましてくる世紀末達。

みずてつぽう、スピードスター、ひのこ、バブルこうせん、かえんほうしゃ……………

……………正直言って、うざい。

さつきから俺は回避不可能のスピードスター以外は完全に回避してる。無駄なPP使って防御するのももったいないからだ。

けどなあ……………このままでも無駄に体力が減っていくだけなんだよなあ。……………そろそろこっちからも仕掛けるか。

考え付いたら直ぐ実行。それが俺のポリシー。そう言わんばかりに振り向きざまにアクアジェット、速攻で距離を詰めイ ブイにつばめがえしを叩き込む。見事急所にヒット！ 一撃で瀕死まで持っていく。

「ブイブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウイ……………」

倒れたイ ブイを抱きかかえ、涙を流す世紀末の一人。

……………これがフツの外見のトレーナーだったらいハナシダナーになったのに……………見た目って大事だね

まあ、とりあえずこれで一人リタイアと言うことで。

必中技であるスピードスターを使えるイ ブイが消えた今、俺に攻撃を当てることは貴様らには出来ない！！ そんな意思を伝えるかのように俺はひらりひらりと攻撃をかわし続ける。さっきまではスピードスターを迎え撃つ為の技を使った瞬間とかも結構狙われて危ない時もあったけど……………

それが無くなった今！ 貴様らは私の足下にも及ばない！！

そろそろ相手をするのも面倒になって来たので、俺は早々にでんこうせつかで振り切るのだった。

それではさようなら！！ アディオス！！ 出来ればもう二度と会いたくない！！

（ふう~~~~~んとか撒いたな。）

俺は川の岸辺で体を休ませている。あいつらはなかなかしつこくてそこそこ体力を削られてしまったからだ。

とりあえず今日はこの近くに目立たないような場所に穴を掘ってそこで夜を明かそうと思う。

ここは近くに川があるから飲み水にも困らないし、食料に関しても森の中であるため木の実やキノコ、それに川では魚や水生昆虫も採れる。

寝床も決まった事だし、早めに穴を掘っておこう。そう思いぱつと見では分からないような場所を探し、穴を掘り始める。

この穴掘りだが、いずれは鍛えてあなをほるに進化させようと思っている。地面タイプの技をたえ一つでも覚えておけばキンセツジムがぐつと楽になる。そのため時間がある時にはちよくちよく特訓をしているのだが全然上達しない。

時間をかければ自分が入って眠る事が出来るくらいの空間は作れるのだが、そんなことでは戦闘では全く役に立たない。なかなかアニメのようにザクザク穴が掘れないのだ。穴を掘る時に回転しながら掘ったりなど、色々考えてはいるのだが……………全て失敗に終わってしまった。

とりあえず今はあなをほるは保留にしてなみのりの特訓に精を出している。

なみのり。PPもそこそこで威力も命中も十分。ここまで使い勝手の良い技は全タイプ中でも中々無いだろう。

それになみのりはトウカジムのバッチがあれば、海を渡ることが出来るのだ。

……そう！ 海を渡れるのだ！！

それは、ムロやトクサネ、ダイビングまで覚えればルネにも行ける。まあルネには周りの岩をよじ登ればダイビングは覚える必要が無いのだが。

それでも扱える技は多ければ多い程得だ。技のレパートリーが少ないと偏った戦闘スタイルになりやすく、相手の実力によつてはパターンを読まれてしまいかねない。

それで時間があれば今使える技を鍛えたり、新技の特訓をしていたのだが……………

それでも今回習得しようとしているあなをほるとなみのりは何故か今までの技のように上手くいかない。何が違うのだろうか？

だが今はそれよりも腹が減った。とりあえず何か食べたい。ココは川なので手っ取り早いのは魚だろう。

俺は川に潜って魚を取り始める。

この姿になって初めて魚を取ろうとしたら、あまりの簡単さに拍子抜けした。

水の中も驚くほど鮮やかに泳げるし、魚も口で銜えて陸まで運んでゆっくり食べればいい。

火は流石に使えないので生で食べるしかないのだが、そこまでまづくも無くそこそこの味だったのを知り、水辺に来た時には積極的に魚を食料にしていた。

（しかし……この姿になって味覚とかも変わったのかな？）

今まで魚、特に生の寿司や刺身はあまり好きではなかったのだが……まあこの姿からして肉食だと言うことは予想出来ていたしな。

そんなことを考えながら穴を掘り続け、自分が入れるくらいの穴が開いたのでどうしようかとまた思考の海に身を沈める。

食料調達は今日はもう出来ない。あたりは既に真っ暗で、下手に出歩くと確実に迷う。それに夜行性のポケモンに襲われる可能性も高い。

同じ理由で技の特訓も出来ない。それに騒がしくすると、余計に何かが集まってきたしまうだろう。

と……なると……

寝るしかないか。

数分考えた結果、今日は大人しく眠ることにした。本格的に活動を開始するのは明日からでも良いだろう。

……今日はいろいろあって疲れた。

疲労も俺の眠気に拍車をかけ、俺の意識は直ぐに闇の中に消えて行った。

翌日

小鳥のさえずり、川の音、虫の声。

自然に囲まれた中、俺はさわやかに目が覚める。

「グアーーーーー（ふあああああああ）」

大あくびを一つ、穴の中から這い出したところで、

グルルルルルルルルル

と腹が鳴る。

……とりあえず朝飯の調達に行こうかな。

そう思い川に入り魚を数匹捕らえ食べる。ある程度腹が膨れ、これから何処に向かうかを考え始める。

今、俺はなみのりを習得できていない。つまり、海を渡らなきゃならないムロ、トクサネ、ルネはまだ行けないのだ。

となると自然にトウカ、ヒマワキ、キンセツの三つに絞られてくる。

その中でキンセツは却下だ。今の実力で苦手なタイプに勝てるとは

思えない。

二つに絞られた選択肢の中で、俺はまずトウカに向かうことに決めた。

理由は二つだ、一つ目はトウカジムのバッチを手に入れなければ、結局戦闘以外ではなみのりは使えず、覚えてもあまり意味は無い。二つ目は俺はまだ空中戦、そしてそれがメインの戦術を扱う飛行タイプとの戦闘に慣れていないからだ。

これらの理由により、まずはトウカシティに向かう事が決定した。

決まったのなら後は簡単だ。向かい、戦い、勝てばいい。

勝つためにはどうするか？ 鍛えればいい。

故に俺はトウカに向かいつつ、特訓をすることにした。到着するころには確実にトウカジムジムリーダーセンリに勝てるようになっていく為だ。

俺は川に沿って歩き出した。心の中で勝利を描きつつ。

「ナマケロ！！ ふぶきだ！！」

「かわせ！ チルタリス！！」

私の指示を聞き、ナマケロはふぶきを繰り出す。相手はなんとか避けようとしたが追い詰められていた為に直撃を食らってしまう。

そして相手のチルタリスを打ち負かす。

「チルタリス、戦闘不能！ この試合、ジムリーダーセンリの勝ち！！」

ジャッジが私の勝利を宣言し、挑戦者は自分のポケモンをボールに戻す。敗北がショックなのか少し落ち込んでいる。

「ミツル君、そう気を落とさなくていい。君は確実に強くなっている。」

その様子を見て私は励ましの言葉を贈る。

だが、お世辞と言う訳でもない。事実彼は前回会った時より桁違いに強くなっている。

前回ポケモンを捕まえるのを手伝って欲しいと頼みに来た時から、三か月もたっていないというのにだ。

「そつえばセンリさん。」

彼から声かけられる。

「何だい？」

「ジムに挑戦するポケモンを知ってますか？」

「え？」

「知りませんか？」

「……いや、噂程度なら聞いた事がある。」

最近噂になっているジムに挑むポケモン。
カナスミジムとフエンジムのリーダーに勝利したとも聞くが……正直、信じられない。

「何処にいる……とかの噂は？」

「いや……聞いてないな」

「そうですか……」

「何故そんなことを？ ……まさか。」
「ええ。」

実在しています。僕はそいつをゲットするためにここまで強くなったのですから。」

そう言った少年の目からは、次こそ捕らえる。っと言つ、気迫が伝わって来たような気がした。

少しづつ、されど確実に物語は動く。（後書き）

5000字突破ア！

以前またもや短い！！　と言われてしましまして……5000字を目標にしてみました？　と言われたので目指してみました。今回は約5100字です。

本当はもっと早く更新できたんですけど、文章がロストしたり、結膜炎にかかったりして……とにかくいろいろあったんです。

それはそれとして、漢検&英検近ーい。今年じゅけーん。

……何でこんな時期に執筆始めたんだろうか。

これからは最終更新から、一か月の間に最低一話、最高三話の更新を目標にしていこうと思います。それでは何人からかアドバイスをもらい、多少は上達した（ような気がする）私の小説を読んでいた、少しでも面白いと思ってもらえれば幸いです。

森の中で熊に出会ってどっかの歌にあったね（前書き）

どうも、遅くなりました。

新設定追加のお知らせです。

ポケモン同士の会話の時は『』を使います。しかし、これは人間には普通の泣き声にしか聞こえてません。

森の中で熊に出会ってどっかの歌にあったね

俺は今森を抜け、トウカまで行く道筋を立てる為、必死になってゲームでのマップを記憶の底から引きずり出そうとしている。
しかし、俺は愚かだった。ショートカットの為にきちんと道に沿わずに進んだ結果が……

……迷子だよ。

……どーすっかな。これから。そんな事を考えつつもとりあえず進み続ける。

考えたってどうこうなるものでもなし、ならば明るいうちに少しでも進んで道に出られればもうけものだ。

それに早くこの森を抜けなければ……

「居たぞ————!!!!!!」

ほらキタ————!!!!!!

いつの間にかこの森に俺がいる事が広まってしまい、トレーナーが集まり始めてしまったのだ。

「逃がすか————!!!!!!」

つてギャーーーーー！！！！　こんなことしてる間に5人に増えとるし！！

「ガアアアアアアアアアア（もういやーーーーー）！」

再び俺の叫び声が森に響き渡った。

あるーひ森の中くまさんにであーった花咲く森の道ーくまさんに出
会ったー

……出会いました。リングマに……

どうやら知らない間に縄張りに入ってしまったらしく……

ええ、既にブチ切れてます。額に青筋浮かんでます。……やばいです。つか何で俺はこんなにも不幸なの？ 右手に何か宿つてんの？ なんでわざわざトレーナー達を振り切つて疲れ切つてるこの夕イミングでなの？

.....
 どうしましょ

「ガア――！！！」

『追い詰めたぞ。』

くそ！ 何で崖なんかあんだよ！ 逃げられないじゃねーか！！

『くたばれ！！』

『くっ！！』

奴はその鋭利な爪で俺を引き裂こうとする。避けられない。

くそっ……………

その瞬間。

『わああああああああああああああああああああああああああああああああん！！！！！！』

何かの泣き声。

『ヒメ！！』

その泣き声を聞くやいなやリングマは向きを変え、ものすごい速度で走りだした。

『おい！！』

流石に何があったのか気になり、俺はリングマの後を追う。ある程度走った所で見つけたのはトレーナーに襲われる一匹のヒメグマだった。

「よし、いいぞ！ そのままたいあたりだ！！」

トレーナーは自分のポチエナに指示を出す。おそらくはまだ駆け出しのトレーナーがポケモンをゲットしようとしているのだろう。

『貴様アアアアアアアア！！！』

しかし、そのポチエナはたいあたりの途中で吹き飛ばされた。リングマがきあいパンチで横から一撃入れたのだ。

そのきあいパンチの威力はすさまじく、ポチエナは木を貫通しながら吹き飛んでいった。7本目を貫通したあたりでようやく止まった。……あれ、人間だったら絶対死んでんだろ。俺はポケモンの強さと恐ろしさを再認識している間にリングマはヒメグマに駆け寄っていた。

「ひっ……！！」

そしてポチエナをボールに戻し逃げだすトレーナー。うん。まあ、しょうがないよね。俺でも怖いし。

『ヒメ………無事でよかった。』

『お父さん。』

……この二人、家族だったのか。……親父と御袋、心配してるだろーな。こっちに来てからあまりそのこと考えて無かったけど……

『痛っ！』

『痛むのか！？ 大丈夫か！？』

『うん。さっき木に叩きつけられて……その時。』

『クソ！！ オレンの実でもあればいいんだが。』

ん？ どうやら考え事をしている間に話が少し進んだらしい。……
背中 of 打撲か。よし。

『使うか？』

俺は非常用に毛皮の中に隠しておいたオレンの実を取り出し、あいつ等の足下に転がした。

『お前……さっきの』

『縄張りに勝手に入っちゃった事は謝るけどよ、まずはそっちの子の治療してやんな』

『……………恩に着る』

『着なくていいぜ。』

リングマはオレンの実をスライスし患部に貼り付けていく。そんな使い方もあるのか……

その上から長い葉っぱを包帯のように巻いて行く。

『来てくれ』

治療が終わった後に俺はリングマに呼ばれ後に付いて行った。

俺は今、リングマの住処である大きな洞窟の中にいる。

『重ね重ね礼を言う。有難う。』

『だから気にするなつて。』

『ヒメ。お前もお礼を言いなさい。』

『うん!! ありがとー!!。』

『いや……だからいいつて。』

この親子は母親がいないうで長い間二人で暮らしてきたそうだし、
しかし……なぜハウエンにはいないはずのリングマ、ヒメグマが
ここに。

『そう言えばお前はこんな所で何を?』

『え? 俺? 俺は……』

狼説明中……………

『なるほど。ジムバッチを集めて回ってるのか。お前だけで。』

『ああ、けど皆強くてな……苦戦してる。』

『けど凄いな。もう二人も倒したんだろう。俺はジムバッチを見る
のは初めてだが……きれいなもんだな。』

『だろう。勝者の証だ。』

『勝者か……』

『どした?』

『いや………』

あの後俺は事情を説明。ジムバッチを集めている事と、トウカに行
く途中で迷ってしまった事も。すると娘を助けてもらった礼として
一泊させてもらい、翌日に道まで送ってくれると言う。いや〜い
い人（ポケモンだが）も居たもんだ。

『そついやお前は何でホウエンに居るんだ？ お前らはジョウトに居る筈だが。』

『その件についてか……』

『いや……別に話したくなければ話さなくとも良いんだ。無理に聞き出す事はしない。』

『……別にそう言う訳じゃないんだ。聞きたければ話すさ……ただ、つまらない話だ。』

『数年前に俺がまだヒメグマだった頃にジョウトでトレーナーに捕まえられてホウエンに来た。』

そこまでは良かったんだが、俺は超超超ビビリだった。ポチエナの吠えにもビビって足腰立たなくなるくらいなの、それが原因で俺は捨てられちゃった。

それからはこの森の中で他の野生ポケモンにびくびくしながら暮らしていた。そしてそれから一年ほどたって俺はリングマに進化した。

『ちょっと待て。』

『何だ？』

『何で戦っても無いのに進化したんだよ。』

『知らんのか？ ポケモンは一定の年月を生きると繁殖の為に経験地に関係なく進化できるんだぞ。』

『マジで？』

『まあいい。話を戻すぞ。』

リングマになっても俺は変わらず他のポケモンに怯える日々。それから少したってから俺はアイツに出会った。

『アイツ?』

『俺の妻だ。』

『なるほど……それで生まれたのがこの子か。』

俺は話が始まる前からリングマの膝枕で寝息を立てていたヒメを見ながら言う。

『そいつと出会ってから俺の日々は一変した。』

お互いに一目ぼれしてな。直ぐに付き合い始めた。それから少したって卵もでき、俺は幸せだった。

……だが、そんな幸せな日々は一日で崩れ去った。

ある日、俺が食べ物を取りにいった帰りの事だ。洞窟のあたりがやけに騒がしかった。胸騒ぎがした俺は急いだ。そこで見てしまったんだ。

とんでもなく強いトレーナーとやり合っているアイツの姿を。普段の優しい性格からは想像できないほどの荒々しいアイツを。

俺は隠れた茂みの中で完全にビビって縮み上がっていた。今思えば情けない。

そしてとうとうアイツはゲットされてしまったのさ。俺の見ている前で。

そのトレーナーは満足そうに去って行ったから卵まで持っていけることは無かったのだが……

俺は最愛の妻を失ってしまった。丁度その時だったよ。ヒメが卵から孵化したのは。

『俺の事を見上げるその小さな体を見たときに決めたよ。俺は妻を

守れなかったけれども、ヒメだけは守って見せるってな。』

『そうか……。』

『おいおい、何しよげた顔してんだよ。お前が気に病む事じゃない。』

『とにかく今日の所は止まっていけ。見ろ、もう日が傾いてるぞ。』

『ああ……。』

俺は真っ赤に染まった夕陽を見つめる。そのとき家族が俺の中に蘇ってくる。

俺は静かに泣いていた。

深夜。真っ暗な闇の時間。夜行性の鳥の鳴き声が静かに響く時間。

俺は夜空の下、星を見ていた。だが夜になって急に雲がかかって星が見えない。それでも俺は空を見上げていた。

寝ようとする和家人の事が思い浮かび眠れないのだ。

『眠れんのか？』

後ろから声がかけられた。

『ああ。』

俺は振り向きながら答える。

『言っただろう。あれはお前が気に病む事ではない。』

『いや……違うんだ。俺も家族のことを思い出してな。』

『お前の家族か……』

『俺さ、黙って出て来ちまったから。心配してるかなってさ。』

『……………』

まあ俺は自分の意思で黙っていた訳でも出てきた訳でもないんだけどな。……それよりも話が續かない。俺の招待を話しても良いんだろうが……おそらくは信じてもらえないだろうし。

『良いんじゃないのか？』

『え？』

『別にお前がそうしたいのならいいんじゃないのかって。』

『でも……』

『お前は親を信じているのか？』

『へ？ 何だよ突然。』

『お前は親を信じているのかって聞いてるんだ。』

『そ、そりゃあ……まあ……』

『ならきつとお前の親もお前を信じているはずだ。』

『！……』

『お前が黙つてようが黙つて無かろうがそれはお前が自分で決めた道なんだから？ だったら親つてのはそれを気持ちよく受け入れてくれるもんだ。』

『……………』

『親つてのはな、何が合つても自分の子供を信じてるんだよ。無論、俺もな。』

『そつか……………有難う。何か色々吹っ切れた。』

『ならいい。お前はお前の道を進んで後から親に謝ればいいんだ。最初は叱られるけどそれもお前を思ってたの事だ。最後にはちゃんと許してくれる。』

『ああ。』

俺の心を映し出したかのように曇っていた星空も、今はもう雲は吹き飛び幻想的な星空が顔を出す。俺は再びその星空を見上げた。今度は迷いで淀んだ目ではなく、きれいに澄んだ真っ直ぐな瞳で。

翌日

俺はリングマに道まで案内してもらっていた。洞窟の近くはけっこう深めの森だったのに、歩いて行くうちにだんだんと木々の数も減少している。きちんとした道に近づいている証拠だ。いやゝゝ助かった。リングマには色々世話になった。いつか恩を返さんとな。

『なあ、そう言えば。』

『ん？』

ただただ歩くのも退屈なので一つ疑問に思っていた事を質問。

『お前さんの嫁ってリングマか？』

『そうだが……それがどうした？』

『ならあんたがホウエンにいる理由は分かったけど、そのあんたの嫁はどうやってここに？』

『それか……何とも目茶苦茶な奴だな。少し長くなるが……』

熊説明中……………

なんとまあ……………纏めるところだ。

そいつは蜂蜜が大好きでその日もその匂いにつられてきたところ、
大量の蜂蜜を発見。

夢中になって舐めていたら出入り口が封鎖されてしまった。しかし
蜂蜜に夢中で気がつかない。

そいつはジョウトからハウエンに出荷する蜂蜜を積んだ船だった。
ハウエンに着いてから発見され、蜂蜜を盗み食いした害獣として追
われる身に。

ジョウトにも帰れず、逃げ込んだのがこの森の中。

そこで二人は出会ってめでたく結ばれた……………と

滅茶苦茶ですな。つーかどんだけ蜂蜜好きなんだよ。ハウエンまで
ばれなかったのは蜂蜜が箱の中に入っていて、その中にいたから気
づかれなかったとかもあるかも知れないけどさ……………臭いにつられて
森から港まで行くなよ。

『つと、着いたぞ。』

『え？ マジ？』

どうやら話が壮絶すぎたらしい。俺は自分の世界に入っていた。さ
て、道にも着いたことだし……………

『おい、これはいったいどうゆうことだ?』

今俺が居るのは俺が少し前に夜を明かした川だ。

『どうゆう事も何も今日はココで寝る。ここからじゃ一日以上かかるしな。』

まだそんなにかかんの!?

『俺は木の実を集めて来るからお前は魚を頼む。』

『……………了解。』

どうやらウソでも無いらしい。日も傾き始めているしな。つーか何時間歩いたと思ってんだよ!! ココから更に一日以上!? ふざけんなよ!!

まあそんな事を言っても状況が変わる訳も無く……………

『魚捕まえるか……………』

俺は頼まれた事をこなすのだった。

森の中で熊に出会ってどっかの歌にあったね（後書き）

前書きでも言いましたが遅くなりました。

しかし、期限はギリで破ってません。分かりにくく勘違いをされている方もいらっしゃると思いますので改めて説明をいたします。

最終更新から一カ月以内と言うのは、ポケモンか旅人（これから増える可能性あり）どちらかを更新したらその一カ月以内にまたどちらかを更新する。

そんな感じです。なのでギリギリですが期限は守られています。

しかし、待たせてしまったのもまた事実であり……

すみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5045r/>

ポケットモンスター 目が覚めたら新種？のポケモンになってました。

2011年9月23日02時15分発行